

奥野英子 著

社会リハビリテーションの理論と実際

佐藤久夫（日本社会事業大学）

著者によれば「社会リハビリテーション」または「社会的更生」をタイトルに含む日本語の書籍は過去に6冊ある。その一覧をみて気づいたが、7冊目の本書は単一の著者によるはじめてのものである。そのため課題意識や視点に一本筋が通っていてすらすらと読むことができ、しかも社会リハビリテーションに関して確かで体系的な知識を得たという読後感が強い。目次構成をまず紹介しよう。

- 第1章 リハビリテーションと社会リハビリテーション
- 第2章 社会リハビリテーションの成立過程と諸定義
- 第3章 海外における社会リハビリテーションの概念とプログラム
- 第4章 わが国における社会リハビリテーションに関わる規定と事業
- 第5章 社会リハビリテーションの基本理念と実際
- 第6章 「社会生活力プログラム」の体系化
- 第7章 社会生活力プログラムの実践
- 第8章 社会リハビリテーションの課題と展望

目次でわかるように、前半部分で社会リハビリテーションの概念・定義について総合的な検討を行っている。WHO、国連、RI（国際リハビリテーション協会）などによる定義の変遷をたどり、日本の審議会答申や法制度上の規定を整理している。「社会リハビリテーション」と関連概念、とくに「リハビリテーション」、「障害者福祉」、「環境改善アプローチ」などとの関係が検討され、非常にありがたい。

資料的価値も高い。

各国の実情の章（第3章）を読むと、「社会生活力向上プロセス」というRIの定義がおおむね理解されているようだが、「広義」、「狭義」いろいろあり、なにをもって社会リハビリテーションと考えるか国による違いは結構大きいと知らされた。ICFを作るプロセスで、「社会的」と「個人的」の区分けのイメージについて国際合意ができず、結局とりあえず「活動」と「参加」の分類リストは一つにしてしまったことが思い起こされた。25のモジュールの英語訳を紹介すれば、社会生活力概念についての国際的な理解が急速に広がるのではないかと感じた。

後半部分では「社会生活力プログラム」の背景、内容、実践が紹介され、わが国の社会リハビリテーションの実践が新しい段階に入ってきたことが知られる。その牽引者の中心人物による整理と報告であり、コンパクトに学べる。

現場のソーシャルワーカーとしての実践的視点、厚生労働省の障害福祉専門官としての政策的視点、RI社会委員会の「社会リハビリテーションプログラム調査チーム」の責任者としての国際的視点など、著者ならではの経歴による視野の広さと深さが本書を生んだと思う。

今後さらに続編で、ICFとの関連、障害者自立支援法における個別支援計画との関連など、本書ではまだ「さわり」程度しか触れられなかったテーマを展開してもらえれば、なおありがたい。

（A5 頁248 本体3,500円＋税 2007 誠信書房刊）